

彼の岸・此の岸(元・9・16)

三神 栄昇(昭6文乙)

今ご紹介頂きました三神栄昇と申しまして、昭和六年の文乙の卒業でございますが、始めは学校の先生にでもなろうかと思っただけれど、やっぱり寺にご縁があったという事で、寺の住職での年までおります。色々、その事で寺の話もせんらんかなあと思つて考えておりましたら、丁度、洛南抄をお出し頂いて、皆様のお手もとに上げましたようですから、これは全部抜いて、原稿の二、三枚は飛ばす事に致します。

それでお寺でそんな面白いかなあと、どんな事をやるんだろかなあと、ふとお考えになるかもしれませんけれども、お寺ていうのはね、今、丁度洛南抄を貰つてぺらぺらとまくつたら、一休さんのお言葉が十頁に出とります。

「諸悪莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教」というんですけれども、ここでは諸々の悪をなすことなかれ、と言うふうには、まあ、今しきに読むならばそうだと思いますが、これは仏法とは

何ぞやと言つて白樂天が鳥巢禪師という立派な禪師が来たので仏法を聞きに行つたらこの言葉を言われた。七佛通戒偈と言ひ法句經有部戒本に出ています。禪宗の方は非常にこの語を大事にしておりますし、事實仏教はこれにつきると思ふんです。言いかえれば諸々の悪い事をする事なかれ、いい事をしなさい。そこ迄はどこまでもあたり前ですけれども、仏教のちよつと違ふのはその後には自浄其意という言葉が出るんです。

自分の心を清くせよ、これは、ただいい事しろ、悪い事するなだけではなくつて、それをやつたら自分はこういう得があるだろうか、こつやつたら人に褒められるだろうか、そういうけちな心はなく心から自然にやれと言ふのが自浄其意です。それを教えるのが仏教だ、こういうふうには鳥巢禪師が答えた。白樂天が何だそんな事ならうちらの方でも、儒教の方でも言うことだし、誰れでも知つてる事じゃないか、「三歳の童子これを知る」と言つたら、禪師が「百歳の老翁これを行う事あたわず」と答えて、それで途端に仏教にこの白樂天自身が帰依したという様なことです。

まあ、因縁もあつてでしょうけれども、今、一休さんの所をひよいと見たらこれが出ましたので、まず私はこれをお借り申し上げまして、「お前、ええ年まで坊さんでお経を読んで、佛さんの作つた歌うとつて佛さん喜ばはるかい」と思われたら、こらおかしなもんですけれどもね、わしも随分そんなことふいと思つて、自分の作つた歌うとつてもろて、何んにも面白ないと佛さん

思っておられるかもしれませんが、これは歌う事によって自分の気持も収まり、又、人さんにもお話する機会も出るかと思つて、八十歳になりますますがずっとお寺におります。

まあ、こういう事で、井垣さんからご紹介頂きました三神でして、今日お伺い出来ましたのも、まあ、これがご縁だと思つて、縁じや、縁じやとわし連れて来て、何が縁じやよ、土間じやもの」と昔の歌もありますけれどもね、とにかく、ひと事になりたつのが縁で、今日こうやつて皆さんにお目にかかるのも縁で、と言うのも私自身が体も、まあまあ調子だし、あるいは又、皆さんに逢えるかなと思つ喜びがまず心に浮んで、ここに来る。貴方がたも何かとお忙しいでしょうけどお繰り合せがついて、あ、お住持さんか、普賢寺というのは俺も行った事があるし、あの時にちよつと逢つたお住持さんかなあ、そんなら一遍顔見てやろうかなあ、というご縁もあるだろうし、又、彼の岸、この岸という題だから、こら人生の一大事、これを聞きのがしたらんでもないところへ、地獄でも墮ちるぞと思つて来られた方もあるかもしれません。だけどね、なかなかわたし自身が、わたしの老僧はね、「坊主はどうせ地獄行きだ」と言われる、「なんで」って言つたら、「人をあだこつだどだましてお布施貰つていい顔しとつて、こんな者が極楽へ行つたらとんでもない話や。」と私老僧に言われた事がある。常に自分の反省の糧にはしておられますけれども、まあそういう事でとにかくご縁でこうやつてお目にかかりました。

この前の時は堀先生が遠方からお越し頂いて、皆様にお話しあつたようでございます。あの時

はお盆、丁度その時にいま先程話しました様に、急にひよいとお話がありましたけど、私もお盆ごちやごちや忙しくもあつたし又の機会と言つたら、「ほんならこの次の九月に」「題はどうしましょう」とおっしゃるから、「いいように、それに合せてする」と言つたところが、「彼の岸、此の岸」でございましてこれはまあ大変だと思ひますけれど、実は私も彼の岸はよう知らないのでね、まあ此の岸は一応分るけれども、彼の岸知らんとこのご案内は出来んけれども、まあお経の本に書いたるて言うか我々が考へているのはこういう物じゃないか、結論的に言ひますと彼の岸はここです。

皆様が心ゆるしあつて心を通わしあつて集まつているこの姿が彼の岸なんです。いわゆる極楽と言うかも知れませんが極楽の世界だと思ひます。

もうここで私の話聞いて儲けようという方もないし、ただお話を聞いてやろうというお姿、これ又喋らしてもらう方も、皆さんの前で誠におこがましいと思ふけれども、私の喋る事が何かお役に立つ物が中にでもあれば幸いかと思ふので、そんな事のご縁でお話さして頂きます。

原稿を書いてこんとお喋りするのに脱線ばかりするだらうと思つておったのですが、初めから脱線で元にはちよつと戻りにくいのでございますが。「暑い寒いも彼岸まで」と申しましてね、彼岸と言うと、丁度体の調子にも具合いい、薄着でもおれるし、又そうむちゃくちゃ暑い……実は今日は随分暑かつて、ここの所知つとつて京阪で来ようと思つていたら、若いもんが知りませ

んのに、地下鉄で行って烏丸から歩いた方が早いと言うので歩いたら遠いわね、それなら、この日向が暑くて、これやったら地下道歩いた方がよかつたかと思ひ、その地下道から上る穴が分からんといかんで思つて早いこと上つてしまつたら、なかなか暑かつた。まあ、こういう様なこととで、お彼岸はいい時期でございます。

このお彼岸でございますが、お彼岸というのは日本だけの行事の様でございます。お経には勿論出ていないし、お経で言うのは、どれもお釈迦さんが喋つたことという事になつていて、「如是我聞」といつて私はこの様に聞いた或いは又、そういうふうな言い方で書かれておりますけれども、お釈迦さんの喋つたのを、そこで録音した訳けでもございませんで、多分、釈迦入滅の後にも、お釈迦さんの精神、お氣持を一つの文学的に作品したんだろうと思ひますが、ともかくお経の中には出てこないんで、そうかといつて中国にあるかと言つと、中国と言ふか支那にもない様でございます。我が国独特の行事の様でございます。所謂、四季の変化を持つた、この日本の良さかと思ひますが、まあ、これは日本独特の様でございます。

何時から彼岸が始まつたのか、私も中村直勝先生に聞いてもないから、調べる言ふか、ちょっと見たら物の本には、大同元年（八〇六）に早良親王（諡崇道天皇）という方、京都へ都を移されました桓武天皇の弟ですが、藤原種継の暗殺事件に関係ありとして、まあ冤罪といふ事ですが、淡路の国へ流されるその途中で亡くなられました。その後で色々京都に天災がおこるので、

親王の成仏される様にと、迷つて居られるから悪い事があるんだから成仏される様にと、諸国分寺の僧に、春秋、三月と九月の所謂彼岸の七日間金剛般若を読ましたというのが初めだと言つております。ともかくこの彼岸会というのは日本の行事ですけれど、誠に又考え様によつては又非常に床しい行事かと思ひます。

彼岸と言ふのは彼の岸と書きますし、それに対しまして此岸、此の岸と。此の岸、彼の岸と言ふとね、極樂の世界と娑婆の世界かと言ふ事かと思ひます。それでこれに渡るには色々な方法、とにかくいい事をしなくちやなかなか行けません。この岸から彼の岸へ行くには、何もせんでも急に行こうと思つたらばいっつと行けるといふそんな簡単なもんなら誰れも苦勞せんのです。そこで一応彼岸に渡る方法としまして、六波羅蜜と言ふのがございます。六つの渡り方というか、方法を履行したら彼の岸へ行くと、こういふことでございます。したがしましてこの六波羅蜜といふのは仏教では大事な修行の徳目であります。

六波羅と言へばふつと連想されるかもしれませんが、六波羅蜜寺というお寺が三十三ヶ所の何番になるかな、清水さんの次あたり、それからこの六角堂、草堂、善峰寺といふふうには三十三ヶ所の観音さん参りは廻るのですが、そこに六波羅蜜寺と言ふのは現在松原の所にあります。ここはもと平家の屋敷のあつた六波羅殿という所の跡ですが、とにかく六波羅蜜というのが大事です。これはご紹介申し上げますと極樂へ早く行けるだろうからちよつと言葉だけ申し上げておきまし

よう。

まず檀、檀はね、物を与える檀那布施です。人に施しをする、ナニ、これは施しと言いますと何かね、所謂現金というすぐ金を出すように思いますけれどもこれは金に限ったもんじゃないんです。いわゆる施と言うのは自分の心を人に差し上げる、報いのない気持で人に自分の気持を捧げると言うのが布施でございます。だから三つに別けてね、施には檀施と法施と無畏施と言うようなことが言えます。いわゆる檀施と言うのは食物等を与えたり或は又お金をあげるのも檀施といってお寺は檀那寺なんて言いますのはその寺を維持する為に金を出す人、ようけ出した人は死んだらいい戒名法名が貰える訳でございますけれどもそういう檀施もあります。それから法施と言うのは坊さんがやるべきことです。所謂法を説く、物の道理を教える、これは坊さんに限ったこともないんです。貴方もふとややこしい子があつたら、そりゃいけないよ、と言うのも法施です。施と言うのは人に捧げるもの、それから一番大事なものは無畏施と言うんです。生きる喜びを与える。人に安心を与える、恐れなき心を与えるのが無畏施です。これを出来るのはひよっとして仏さん神さんだけでしよう。

今度は戒と言うのを申し上げます。戒と言うのは自分の生活を切り詰めるのじゃないけども抑制して自分の思いのままにしない事、これが戒でございます。それを細かく分けますと、皆さんお寺に行きますと「これからお授戒でございます」とお寺さんが有りがたくお話してくれる。こ

れは所謂十戒と言って徳目としては十ありますが、みんな覚えるのは大変だったら初めの三つ位でも結構でございます。

覚えて頂きたいのはまず一番初めは不殺生。殺生と言うのは生き物を殺すなと言う事です。けれども実際我々が生活をする場合に殺生をせずにはおれません。我々は所謂自分の生活というか命を支える為には何かの犠牲の上に、まあこれは或は生きものを殺す場合もあるでしょう。今日はビフテキにしようかと思えばたちまちお気の毒な牛が出来るんです。だけどこれはやむをえないのです。ただ私は「生命を殺すな」言う事は、その物の本来持っている命を殺すなと言うことと、自分では解釈しているんです。

自分がビフテキが食べたいからあんな事言うと思いなさるかしらんが、とにかく我々はその物が自分の犠牲になって死んでくれたらその命を生かしてと言いますが、その気持を生かして、言い換えれば無駄にしない事、物の生命を無駄にしない事、魚を食べる場合もあつて、肉を食べる場合もあるでしょう、ただししかしそれは欲望の為に食べる場合もあるでしょう。ただししかしそれは欲望の為に食べるのではなくて、自分の身体を維持するに止むを得ぬ、これは不殺生です。だからして自然界でも常にいわゆる強食弱肉と言うか大きな獣が小さいものを食う事が行われている。しかしこれは自然の摂理です。けれども動物どもは腹いっぱい以上は食わない、人間はついである上にも、持って帰ったら捨ててしまふ魚でも釣る。と言えば悪いけども、つりの好き

な方には申し訳けないけどもし釣って来たら充分に多くの人に食べてもらおうと言う事でその魚も成仏するんだろうと思う。不殺生は無駄にしないこと。そういう事になりますと、紙一枚でも皆さんの労力によって出来たものです。

この頃はあまりにも包装紙等が多いので「もったいない、もったいない」と私が言うと、嫁どもが「おじいさん少々頭を切り替えなくちゃ。」と言うけれどもこれはどうもそうはいかん。やっぱり作られた紙は紙一枚の生命、これを無駄にする事がやはり殺生かと、電気でもそうですね、クーラーにつけ必要な時は使ったらいけれどいらん時には消し無駄な電気は使うな、これが私には不殺生だと思っているので。まあとにかくしかし多くの場合は殺生と言うのは殺人でございませう。殺人の罪の重いは古今東西同じです。所謂教団の中で自分の仲間を殺したと言うのは、これはパーラジカ（波羅夷）というて教団から追放される、教団から追放されるいうことはインドの場合はもう餓死するよりしようがなかった。そういう事が殺生です。

その次に不偷盜と言っておりますが、偷盜と言うのは盗み、偷と言うのはこっそり盗む、盗は強盜の盗で、強奪する、どちらにしても自分の物に属しない物を手に取ると言うことはこれは今でも法律で禁じていると思うんです。これはやはり人間社会の平生丸く行く為には是非必要なのが不偷盜です。

その次に不邪姪です。不邪姪と言うのは下半身の始末が悪い為に色々な問題をおこして、この

頃まあまあいな話をチヨイチヨイ聞きますが、所謂我々人間が子孫を作る為にはそれはなくてはならん、一つの美しい花が咲くのといっしよでございますからこれはなくてはならんが、この所謂よこしまなる関係と言うものは仏教では特に戒めているんです。まあああいう事を起した人はまあね仏教の信者でなかったと言うか聞いとつてもすっかり忘れておったんだろうと思うし、自分等でももしかして又私自身がふと思うと自分自身がやりかねない物を持っている。誠におはずかしいことだけど、キリスト様がこの所謂「自分に覚えのないものはこの人を打て」と言った話がありますが、本当に自分の心は誠に弱いものです。そういう事を思いますと常に反省して行くのが不邪姪です。

それから後はまあまあよっぽど軽くなりますんですが、お聞き流しで結構ですが、不妄語、嘘をつかない。不綺語、不綺の綺はかざり言葉でこれを言わない。不悪口、人の悪口を言わない。人いやな思いをさす事は言わない。不両舌、これは二枚舌でございますね、二枚舌を使わぬ。不慳貪ふけんこんものおしみ、むさばりをしない。それから不瞋ふちん、心に怒り（瞋）、顔に出して怒る（恚）、怒りを押さえない。

それから最後は不邪見と言う言葉になってくる。邪見と言うのは何かと言うと元来よこしまなる見界と言うことです。よこしまなる見界が何やと言うと、簡単に申しますと因果の理を無視するのがこれが邪見、悪い事したら必ずそれに対する自分に報いがあると信ずるのが不邪見です。

悪い事をして誰が知るもんだ、だけど「天知る。地知る。我れ知る。子知る」でしてね、決して自分自身の心に恥じるような事をしないのが本当であります。

この頃見てますとどなたかがお気の毒な最期をとげなさる、その原因は誰れかと言うと結局分からず証拠不十分になります、やった人は俺は分からなんだでよかったなんて思う。その因果の理法を無視したのが邪見です。必ず因には結果がある。そしてそれは或はこの私達の生きている間にあるか否かは分かりません。ひよっとすると次の世に出てくるかもしれない、又もう一つの世に出るかもしれないと言うそういう風になって、知れんどころじやない、必ずあるんだと言う因果の理法、あるにもかかわらず因果の理法を思わない、因果の理法と言えば坊さんくさい様であります、因果は委しくは因縁果報で必要にしてかつ充分なる条件と言う事でございますね、今の科学者だって同じ事ですね。どうもおかしいぞ、これは、所謂必要なる条件がたらんかと言う事で世の中は進んでいく訳です。この因果の理法はつかうかつかうかして無視した様な事をやってはいけません、これは本当に考えれば無視出来ない一つの理法なんです。

まあこういう様な事でこの所謂檀、戒から始まって六波羅蜜の二つを皆さんにお話ししました。次は忍です。これは辛抱しろと言う事、それから進、精進と言う言葉がありますが一生懸命に努力、それから心を落ちつけなさい禅、知恵を磨きなさい慧、これで檀・戒・忍・進・禅・慧、と言つてこれが彼岸へ行く六つの方法なんです。我々まあたいていこの内の一つか二つを守れたら

いい方でして、どうも彼岸へは行きにくい、これではちょっと困るので後で行き易い方法をこれからご案内申し上げます。

今申し上げますようにね、所謂彼岸と言うのは、彼岸に対し、此岸と言うのはいわゆるまあみな理念精進の世の中でありまして、所謂常楽の涅槃、心豊かな世界と言う事でございますが、じや此岸と言うか此の岸と言うのをまず考えてみましょう。これが仏教の初めなんです。仏教と言うのは何も此岸考えんでも、此岸が朗らかでしようがないなら、仏さんも神さんもいりません。だけでも此岸を一度ちよいと考えたら、「ああ何とか」と思うのが所謂人間の良さでもあるが、動物なんかはそんなこと考えてないかもしれんが、我々には考えざるを得ないものでございます。所謂彼岸と言うのは、まあ丁度色々話が出ますが、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のこわりを表す」。これには赤松先生の平家物語と言う研究があります。

赤松先生でピンとこなかったかも知れませんが、三高の先輩で普賢寺の観音様をやってもらった京都府の文化財の課長さんでして、あの方のお世話で私ところの、皆様おいでになった時の本堂は、やや型を整えた、まあそれは三高には関係ある赤松先生をひよっと引っぱったんやけども、とにかく平家物語は哀調をおびた平家琵琶の音と共に皆さんの中に若い時分に読まれた一節じゃなかったかと思えます。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必

衰のことわりを表す」とにかくこの「諸行無常」は、これは実は平家物語の作者がお作りになつた言葉じゃなくて、涅槃經と云うお経の中の言葉、涅槃經と云うのは釈尊が亡くなった時にその様子を釈尊と云う人は偉い人だったからと云つてその前生譚から書いたのがこれが四十巻もありますその中の言葉です。

諸行、すべての存在は常なきものであつてこれは必ず消滅するものである。この消滅の姿を越えた所にこの彼岸と言いますか、涅槃寂靜の境がある。こう言うのが大体諸行無常の響き有りということでございますね。それで仏教はとにかく世の中の無常であると言う事を悟るのがまず第一だということです。我々は常と考えるからこそ変わるとは痛い、と云うか心痛いを覚えます。又、自分は辛いなと思つているこれはいつまでも辛いなあと思つから辛いんで、これも一時、あれも一時、まあ会社にお勤めなさつてゐる、又経営が苦しいといつたつて、そんなの苦しいのが未来永劫続くもんじゃない、すぐ又次の時が来る、こう思えば何にもまあね、その時その時の絵を画くという言葉が悪いけれど手立ても出来る。我々は常と思つ所に捕まえたもの放すまい、放したものは惜しいと言う気持ちが出るんですが、無常というのを悟るのがこれが大事なんです。と言いますと何か無常感ばかり誘つてこの現世の苦しさを色々言うようだけれども、これが仏教の初めであるのでうっかりするとかいかにも仏教と云うのは厭世感の固まりみたいにも思われますれば、そうじゃない実はこれを知ることによつて本当の自分の人生、所謂彼岸をここに持つて

来る訳でございます。だけど無常を考えると、ふと考えるとお前うまいこと言ってるけど実は無常と言うのは辛いもんじゃないか、あの人は、あ、こうやって顔みとつても、あの人は逝ったと言う事になるわね、ま、一期一会と言うことは仏教の方ではよく言ひまして、一生に会うのは今一度だという気持を喧しく言うんです。

お互にこうやって会って会っている時の一時が大事です。ね、だからもう一度会えると思うと、なあに又今度会おうね、やあやあと言うことになるけれど、私自身こうやって話させてもらっているけれどこの次の会合に出るか出れんかは請けあえんです。ね、これを一期一会と言ひます。と言うことは私達は常に他人と交わる時にね、この時が最後だと思ふならばその人に嫌な思いもさしまい、もし嫌な事があつてもこれでも別にこの時が最後なんだと言うことで。ま、こう言う話がありますわね、お婆ちゃんを世話した嫁さん、この頃はもう核家族になつてあんまり世話しないけれども、お婆ちゃんを世話しとつたのをもうこの人え、加減なところで死んでくれんかいな、自分の檀那寺のお住持さんとこ行つてあのお婆ちゃんこつそり祈り殺してくれんやろかと頼みに来た。そしたらおっさん、うんお前そういうな、そんなら、ま、わしの法力であのお婆ちゃん殺してやるから、だけでもあのお婆ちゃんころりと死んだらお前が寺へ行つて祈り殺しを頼んだんやと思われるといから三年間程、三年とはいわんわ、とにかく一遍孝行の格好して見ろよ、そしたら俺が祈り殺してやろうと言つたらころりと、お婆さんの気持も変り嫁の世話する気

持も変り、そこに自然に和やかなものが出てとうとう三年で殺してやるといつた三年の日が来た時に、おっさん三年というたけれどお婆ちゃん死ぬのはかわいそうだこの際一つ延ばしてもらえんやろか、まあ、まあそんならそれでよからう何んとか延びる様にしてやろうと言うが、これね今日が最後だと言うから、明日お婆ちゃん亡くなると思うから今日のお世話が出来の、これまだ一年先迄世話せんならんかと思つたら「えーい養老院でもほり込んでやろうか」ということだけど今日一日だと思ふことが大事ね、今日ーということが大事、会つて嫌なことがあつても今日一日、もし良い事があれば今日一日大事にしたいと言ふことじゃないか。これが一期一会でございませうけれどもね、とにかく無常つて言いますか人が死んだ時は無常をふと感ずるんです。

自分の子供を亡くした、山上憶良が、ま、長い歌がありましてその返し歌にね、「若ければ道行きしらじ、まい（賄）はせん、したえ（黄泉）の使負いて通らせ」と言ふことは、仏教が入るも入らんもとにかく人間の本性でしょう、小さい子を亡くした、「瓜食めば子供おもほゆ栗食めばましてしのばゆいずくより来りしものぞまなかいにもとなかりてやすいしなさぬ」と言つて可愛いがついていた子が死んだ、この時に若ければ道行き知らじ、礼はするから、まいはせん、したえのつかい、黄泉の使いようぞあの子を闇路を負うて通らしてくれと言ふ願ひ、これはもう人間の本性です。

まあそう言うことで年寄になりましたも、「今迄は人のことだと思ひしに、俺が死ぬとはこい

つたまらん」と、言う句もあるんです。これはまあ十返舎一句の辞世の句だったけど私身にしてみても、私の気持ちいっているなと思うんですね、まだ私死ぬとこの迄の様子は分かんけれども死ぬ時になったら、人は「あらもう年、もうぼつぼつ、あいつ死んだ、かわいそうに早かったなあ」位でおるけど、俺が死ぬとはこいつたまらんでしょうね。そういうことだと思いますとね、しかしそう言いながら十返舎一句「こいつたまらん」と言いながらえろうたまっても、たまってもいけないけろつとしたところあるんじゃない、それには彼の一つの達観と言いますか何かがある様な気がするんですね。

私達が年に一度だけ読むというお経があるんです。だけどこれ字のわきに節がついておって今こそ書き下しの物を出しましたけども元はひっくり返り読むと骨折りました。けども私も教えた事がありましたのでそれをやる訳ではないけれども、二月十五日、今から紀元前四八五、六年にお亡くなりになったと言うからまあもう随分前の事ですけども、その釈尊を慕ってこのお経出来たのが何時頃か知れませんが、遺教経と書いてますから、遺言と言うことになってますけど、このお経は涅槃経が先程申したように四十巻もありますけども、一卷の非常に簡単な物です。

訳者は羅什三蔵と言う有名な法華経等を訳した人でございますが、この人が訳した言葉だけあって、かつ又非常に簡潔なんで、我々お通夜に読む場合もあります。けれども、これ読むと坊さ

んの悪口ばかり書いてある。坊主これしたらあかんぞ、自分のお弟子さんにわしの死んだ後することなかれと言つて止めたので、これ読んでいると自分の悪口言われてる様でちよつと悪いからたいいていの場合抜いてさわりだけ読んだりすることもありますけれど、とにかくお釈迦さんは二月十五日、「如月の中の五日は、鶴の林に薪盡にし日なれば……」は増鏡の書出しです。とにかく二月十五日に亡くなられた。

西行法師も、「願わくば花のもとにて春死なんその如月のもちづきの頃。」そう言う歌もあります様に、今から紀元前四百年、とにかく三千年か二千五百年前に亡くなったお釈迦さんですけど、その精神はここによく出ていると思ふんですがね、このお経は簡単でしてね、たいいていの場合「如是我聞」とあつて、次に誰れと誰れと来てこういう事があつたと書いています。これはもうすぐその物ずばりで、「沙羅双樹の間にして（お釈迦様は）まさに涅槃に入りなんとす。この時、中夜寂然として声なし、もろもろの弟子の為に略して法要を説く。」と言う初めの書き出しがそういう簡単なものですが、我々になぐさめてくれる言葉があるのでこれだけ皆さんに。まあ自分の身体、これなくなるといふ事は非常に悪い様だけど、お釈迦さんこの時こう言っているの、丁度病気がなくなる様なもの、「悪病を除くがごとし、罪悪のもの仮りに名づけて身とす。」今この身を捨てて、所謂本当の涅槃、寂靜の世界、お釈迦さん悟つたので涅槃にお入りになったと言ふけれど、これは人間として生きました限りいくら悟つてみたって物を食べなければ腹も減るだ

ろうし、だからして頭の中で悟っても有餘涅槃と言つてまだ余りがある。昔の前世の因縁でもらつて来た我々肉体がある、これがなくなつたのを無餘涅槃と言いますが、お釈迦さんは今迄は涅槃といひますか、精神的ないわゆる解脱といひますがね、解放を得たでしょうけれどもいよいよこれから身を捨てる時に言うの、「此は是れ捨つべし。罪惡の物仮りに名づけて身とす。老病死の大海没在せり」。今これが無くなることはむしろ怨賊を殺すが如くして、むしろ歡喜すべきじゃないか、お前達泣くなよ、世の中は、一切はこんなふうには壊れて行くものだ、會つて離れざることはいよいよべからず會うものは必ず別れるんだよ（取意）」と、こういうふうには言つておられます。これが所謂娑婆の世界です。

娑婆の世界をいわゆる普通四苦八苦の世界だと申しますが、四苦と言うのは、生・老・病・死、これは肉体的なとだから止むを得ませんわね。生れた時は苦しかったか知らんまに生まれたんですけれども、ね。それからやつて来ますと今度は老という我々のようになちよつと足がややこしいなというのや、その次は病氣というのは、そして最後に訪れるのは死です。生老病死と言うのは人間にといひますか、この世の生を受けた以上は止むを得んですが、その外に我々は四苦八苦といつて八つあるわけ。今の生・老・病・死の肉体的なもの外にもう四つ、それをよせて八苦といふんですが、先ずは愛別離苦と言ふ。

愛別離苦というのは好きな人と別れなくちゃ、これがまあね歌謡曲あたりではええのでしょう

けれども、とにかく好きな人と別れるという所の苦しさを歌ってうまくやっているものもありますけれど、これは歌で聞いとると、なる程なと言ふことでそれは面白いけれど自分の身になった時、愛する者と別れた時これは自分の子供であれ、親であれ、つらい事です。

怨憎会苦、いやな人と会わねばならぬ苦、これは先程のお婆さんのお話をした様にこちらの心のもち方でも変ることもありますし、これも一時あきらめる事が大切です。

求不得苦、求めるものが手に入らぬ苦、無理な希望は持たない事です。お前の方は何も無いぞよと言われたらなる程と思つています。自分も家はない、ないけれどなんにも別に自分の家を持つとうと思わん。これは所謂足るを知ると言ふか、自分より上見りやきりが無い下見て暮すということも大切です。天上まで行つて見たつてこれにはきりが無い、下には多くの人、自分より下の人を思ふ時には自分は結構だなあ、又余裕があつたら何とかしてあげなくちゃということになろうかと思ふんです。

五盛陰苦ごじやういんく、心身に生ずる苦しみ、血しおの燃える苦です。生きている限りは仕方ありません。

どうもこら一寸彼岸迄行かず此岸で終りますけれど、こらが大体腹に収めて頂きましたらばつぽつ彼岸でございませう。言い換えれば我々の土地をもう一遍見なおして見ると、実はこの禅宗あたりでは、修証義に「生をあきらめ死をあきらむるは仏家一大事の因縁なり。生死の中に仏あれば生死なし。生死即ち涅槃と心得て生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし。」

私の出は禅宗の普通の在家ですからこんなもの母親が読んでいい言葉だなあと思うんです。とにかくこの生死と言うものいかにも辛いと思うけれどもこの中に仏さん、仏さんは地獄に仏と言うことはある。仏さんはなんにも極樂で取まってござる仏なんて、こら菊地寛の小説か何かしらありましたね。本当に極樂にいてあれ何にもする事なくて、欲しいなあと思つたらさつと眼の前にいい風が来るなあ、極樂の余り風と言うけれど向うの方で吹いている風とてもさぞかし余り風でもあんだけいそよ風が来るんだから向うは多分いいだろう。だけど毎日あれに吹かれておつたら冷房の中に入ってじつとしているのと一緒、これ又退屈じゃろう。ほんだで信心深いおっさんが極樂に行った、おばあちゃんも行った、そしたらおじいさんがいてよかつたよかつた、おじいさん何にもせん、おばあさん何にもせん、毎日毎日御飯もほしい時に食う、何もすること無うて座つとつて「おじいさんどうもこんな事何時迄するのや」「いつ迄もいつまでも」なあおばあちゃん……「下界にはひ孫もおり子供もおり地獄と言うおもしろい所もあるそうな、おれはこんなとこかなわん」と言った。本当にあんだ方極樂に生れてね、すべてのこと思う通りさされたら本当にこれ退屈でしようがない。やらんならんと思うことありやこそええので、まあそんなこと思いますとむしろ我々はやる気で居ることが出来る世界、これこそむしろどっちかと言うと本当は極樂なんですね。だからして所謂まあ極樂、極樂で願う極樂往生、南無阿弥仏もいいし、まあそれによってわしの亡き人もあそこで会えると思うのもよかろう、だけどふと思えばその人の亡

き人は自分の心の中に何時も見ている。そういう気持こそ本当に大事だろうと思うんです。

何にも極樂に行つてあそこで会う。中村メイ子さんが美空ひばりさんが死んだ時にああ又向うへ行かれた、私も又向うへ行つたら会いますわ、と、その考え方も一つは一つでしようけれども、私達の心の中には親の心があり仏の心があると思つた時、私達の心こそ本当は仏心であり極樂の世界にいるそれを所謂気分転換ですね、気分転換と言えばえらい簡単だけれども、先程申しました様に極樂に行く道六つ教えましたけれども、まずしかしそういう道長い、ちよつとやそつとの苦勞であそこ迄行けるもんやない、もつと何かあるんじゃないかとやったのがこれがまあね一般の仏教では永い間三劫成仏、永い間の修行が必要だ、だけれどもこんな事しとっちゃこつちがまにあわんと言つたが、まあ弘法さんが始めたのが、わたしは又真言宗だからそういうて、お祖師さんの提灯持つ訳ですけれども、これではいけない、これは実は我が身に自身に仏はあるんだ、禅宗の言葉であれば「生死の中に仏あれば生死なし。生死即ち涅槃と心得て生死として厭うべき無く、涅槃として欣うべきもなし。」これはまあ禅宗と言うのは鎌倉時代ですから弘法さんより一寸後になりますが、その前の所謂平安時代に出た弘法大師と言いますか真言宗の開祖は、「生まれ生まれ生まれて生の初めに暗く死に死んで死の終りに冥くろし。」いくら生れ変り死んだ所で死もわからん生もわからん。だけでも平素は「痛狂は酔わざるを笑い、酷睡は、覚者を嘲る。」一杯飲んだ人は、飲まん奴馬鹿飲まんかい、と言うし、寝ぼけた人は起きて働く人が馬鹿に見える

ます。

寝てる方が楽だ、こんな事を言うてるけれど、そんな事をしておって本当の自分の良さ、とい
いますか、仏様を見ることが出来ようか、という事です。本当の仏様というのは何かと言いま
すと、私達は今しきの言葉で使つて、お大師さんといひますか、弘法さんには怒られるかもしれん
が、大自然といひますか、宇宙の精気だと思つたのです。宇宙といふのは、これはご承知のよう
に、すべての物が調和ですね、だから我々の細胞がいくつあつて出来ているから、これがバラバラに
なるだけじゃと思つたところで、人間の人生生活の解決にはならない、我々には、実は宇宙の力
によつて生かされている。もし我々が死んだつて、又宇宙の地に帰る。我々の方では、「阿字の
子が阿字の故里、たち出でて、又たち帰る。阿字の故里」阿字といふのは絶対否定であり、絶対
肯定の言葉です。

阿・吽の呼吸てのは、生まれた時が「あ」これは初めといふことですね。だから「うん」と言
つたのは左様ならの時です。あ・うんの呼吸が合うといふのは、いわゆる我々は生活しておしや
べりするならば、口を開けば「あ」、終れば「うん」でございます。これは平素あ・うんの呼吸
をやっている訳なんでございます。これによつて、我々八十年頼みもせんに、心臓が動いてく
れ、肺が働いてくれる訳です。といふことは、これは宇宙生命によつて生かされているといふ
ことを考えた時、これこそ本当の我々の方では曼陀羅の世界といふか、調和の世界、これに気づ

いた時に我々は調和を自分の欲望の為に壊すようなことがあつてはいけない、生命を無にしてはいけない。これが真言宗の考え方でございまして、こうなれば、いわゆる『柳は染む観音微妙の色、松は吹く説法度生の声』というような天台の方の言葉ですけれども、『白雲青山これ浄土、餓鬼畜生これ仏身』だからして仏さんてのは、地獄にもござるところまでいけば、我々どこに生まれようと苦にならなくなる。常に我々は極樂行かなくちや仏さんに会えんと思つて努力する。そのことによつて又、我々はどこへ行つても仏さんに会えるという一つの信念が得られるんじゃないと思つてんです。

だからして、皆さんお互いに若い方はおられん様でございしますが、色々なところを越えて来て、ぼつぼつゴールでございしますが、とにかく今、お互いに考えたいのは、今日生かされているのは自分で生きたんじゃないやなくて、実はこれ有難いご縁というか、宇宙の恵みによつてこうやって生かされている。そして我々又、いつかどこかへ行くとしても、やはり大きな世界の大きな物に抱かれて、これは阿弥陀さんとお考えになる人もいいでしょう。又、大宇宙の大自然の力の中、私達の真言宗で言うならば、大日の光、お日様よりもっと偉い人、いわゆるお日様というのは夜昼なく照らす、暗をぬぐつてくれる。そして、すべての物を成育してくれるというのは太陽でございします。これより偉い人を大日と言つております。

大日の手元に行くんだと思えば、まずまずえろう苦になる事もない。まあ一つ心の持ち直して

してね……。こういう事は、息子は「今日は草履が売れんで困った」と言う。なんでやと言うたら「雨が降る」、今日は天気になった、「今日は傘が売れんで困った」とおばあさん、しょっちゅうアツアツ言っている。けれども、「雨が降った時は雨の傘が売れるじゃないか、お天気になったら草履が売れるじゃないか」と思ったら、おばあちゃんどうやと言ったら、ああなる程と言って毎日朗らかになったと言う話がある。我々は心の転換が大事です。

弘法さんなんか「明暗他にあらず、信修すればたちまちに証す。」と言って居られます。あたり暗くて何も見えない。電気をつけた時にパツと明るくなる。そのつけるつけんが問題ですね。お葬式に棺に入れる笠にこう書きます。「迷故三界城、悟故十方空、本来無東西、何処有南北」

本来無東西、どこに南北あろうか。今は東や西と迷っているけれども、西や東と言うのは一応いい事、悪い事、それが無かったら世の中渡れませんかけれども、しかしそれにとらわれますと、こっちが東だと思つて実は西へてく歩いてる方違いもあります。

東に行つても西に用事があつて、東に間違えて来たとすれば、忽ち戻るのが本当です。だから我々もひよいと気がついたら、正しい道と言うか、善道へ戻るのが本当と思うんです。

悟故十方空というのは、悟ればすべてに執われないということですが、一寸宇宙船に身を置いたと想像して下さい。そこには地球で規めた東西南北無く、永遠の宇宙の神秘の世界があるだけ

かと思えます。

お互いにもっと大きな宇宙的な、この頃はやっておりますが、いわゆる世界的というより、むしろ宇宙的な気持ちで私達の気持ちを大きく持てば、生きるといったって、死ぬといったって、尤も私が死ぬ時はちよつと困るけれども、別に大したことはないと思つて、そんならば、おら、ほうーつとしているのがええか、こいつは間違ひです。我々は我々として毎日やるべきそれぞれが営みがあるはずで、それは老人だから、おれはやめだというのは逃避でして、私達老人らしく一つその日に生き、生き生きとした皆様のお姿を拝見したいものでございます。

その他にも、お寺のこと申し上げるべく書いた原稿、「お前とこは、観音さん、どんなこつちや、観音さんでなんだ」というようなこともついでに話そうかと思つたが、つい脱線の方が多くなりまして、原稿用紙は置いたままになりまして申し訳なかつたけれど、まずこんなことで、今日のご縁を喜びまして又というのは難しいけれども、一つ皆さんご機嫌良く、又のお目にかかれる機会があれば幸いです。

どうも長い間、ご清聴ありがとうございます。

(真言宗智山派観音寺住職)